

旧函館区公会堂 調査事項 1 歴史について、2 現状について

旧函館区公会堂を視察しました。



1 歴史について、

施設（HP）の説明文によると、以下の通りです。まず、冒頭分、下段は詳細の一部です。

旧函館区公会堂は明治43年（1910）に建てられた、洋風建築の代表的建物です。

昭和49年（1974）に国の重要文化財に指定されました。

気品漂う内部には華やかな雰囲気のある家具や調度品が展示されています。



（以下、詳細分の一部）

旧函館区公会堂は、明治40年（1907）8月の大火により、町会所・商業会議所が焼失してしまったため、住民の集会所・商業会議所の事務所として明治43年（1910）9月に竣工されました。この時、住民有志による「公会堂建設協議会」が発足されますが、大火後であったこともあり、寄付金が当時の金額で数千円しか集まりませんでした。そこで、当時の豪商「相馬哲平」氏へ相談をした結果、5万円の寄付があり、約5万8千円で建築することができました。（設計は函館区技手小西朝次郎、監督は函館区技手渋谷源吉、請負は函館区民の村木甚三郎）大正12年（1923）に商業会議所の事務所が移転したのち、演奏会や展示会の会場など広く函館市民に利用されました。



2 現状について

(戦後は大半の人にとって歴史でしょうが、筆者にとっては現状の一部になります。)

戦後の混乱期には軍の司令部や病院などとしても使われ、その後は海難審判所や営林局の事務所が置かれました。

昭和 29 年（1954）の洞爺丸台風の際には 1 階大食堂で海難審判が開かれました。

市民および観光客向けに建物を一般公開するようになりました。

また、当時の社交界の華やかさを体験できる貸衣装サービスも行われ、年間約 15 万人が訪れる市内有数の観光名所となりました。

そのほか音楽団体によるコンサートや地元高校生による野点など生涯学習施設としても使われました。

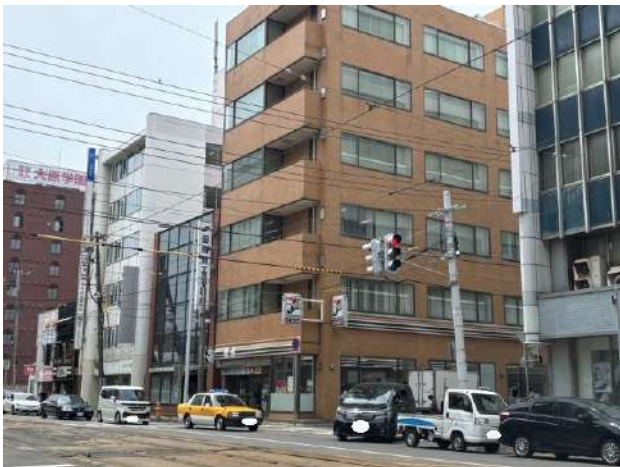
施設（HP）の説明文によると、上記の通りです。



<所感>.

◎現在の商工会議所について

現在の商工会議所は、函館駅の近くに大きな通り沿いの場所にありました。商工会議所は、自前の独立したビルでした。視察対象にはしておらず、外観だけを観察したのみでした。3F建ての立派な建物でした。以下、2点の写真を撮影しました。



◎旧函館区公会堂の施設について

さて、視察で訪れた、旧函館区公会堂の役割である、「町会所」のイメージはわいてきません。今の発想で言えば、町会所と商工会議所は全く別ですが、実際には商工会議所の委員が運営していたものではないでしょうか。幅広い函館市民の方に利用されていたものと思います。

施設内には、商工会議所の事務所がありました。その広さから見て職員数（10人以下ではないか）も限られたものとみられました。その理由として当時の商工会議所のメンバーはその事業数が今と異なりあくまで少数であり、参加メンバーは相当数の雇用者があつたり、売り上げも相当数のものがあつて、メンバーになっていたのではないのでしょうか。つまり、商工会議所のメンバーになること自体が、ステータスでもあつたのではないかと推量しました。具体的な資料ではなく、あくまで、この施設を見たことでの感想です。以下、施設内の写真を掲載しました。

なお、後に商工会議所は別の場所に越したという記述があり、今の仕様がどの時代のものかわかりにくさがありました。



商工会議所の事務所の規模に比べ、この旧函館区公会堂の講堂や食堂は豪華でした。講堂は、むしろ、ホールの印象でした。函館区民の集会所として音楽会や講演会等の行事に使用されと言うことで、それらのあり様が現在のあり様よりも、より高貴なイメージでとらえられていたのではないのでしょうか。それは、この施設内に球戯室（ビリヤード）があり、2台も球戯台がおかれていたということですが、こうした球戯室は、三菱財閥旧岩崎邸（現在は東京都の施設、旧岩崎邸庭園）でも重要施設としてあり、往年の社交活動ではビリヤードが重要な位置を占めていたことがうかがわれます。現在は左下の写真のように、説明資料の配置台になっており、当時の利用者の社交生活ぶりはうかがえないものでした。





また、立派な大食堂と小食堂がありますが、大食堂は厨房を伴ったものではないということで、外部で調理された料理を持ち込む方法がとられていたという説明でした。ここで、食事をするということではなく、会食（パーティー）が目的の施設ではないかと思いました。

HPの記述に、大正12年（1923）に商業会議所の事務所が移転とあるのですが、現在の施設にも商工会議所の事務所用区分があり、その後は別の目的に充てられたのではないのでしょうか。

◎旧函館区公会堂の名称について

まず、公会堂というのは町田市にはなく、現在の生涯学習センターが町田市公民館と称され、町田市に1館だけありました。現在の町田市立文学館として使用される建物の改修前の建物がそれにあたりました。私が初当選した頃（約31年前）は、公民館でした。

また、公会堂というのは町田市相原町に行くと数カ所にあります。大きめの町内会館と言うスタイルですが、地元の完全管理になっており、地域活動の拠点であることは変わらないようです。

ちなみに、私の青少年時代に生活した福岡市には、大規模の公会堂がありました。福岡市立の建物でしたが、その後は市民会館などに機能が変わっていったのではないのでしょうか。公会堂で一番有名な施設は、日比谷公会堂でしょう。日比谷公会堂は大きな講堂を持っており、歴史的な有名な演説会などが開催され、昔は人が集まると言えば大都市では公会堂でした。なお、私が議員になって以降、この日比谷公会堂の自治体関係の集会で利用したことがありました。

その中で、函館は商工会議所が建設し、建物は豪華で優美さを持っているのが特徴であることを、今回の視察を通じて知りました。

さらに、他に例を見ない「区」の名称は、函館にかかわる資料を見ると、函館市と呼称されず、函館区と言われる時代があることが散見されましたが、この旧函館区公会堂の施設には、それを明確に示す資料は見当たらないようでした。よって、今回はそれ以上の記述は控えたいと思います。



函館の街を作った4人の人材の像と、石碑がありました。

◎皇族ご利用施設

施設内には、皇族の方々がご利用になった際に合わせて改修された部屋があり、現在もその部屋の仕様の状態で保存されていました。寝室などもありますが、旧函館区公会堂の機能とは趣が異なる面もあると考え、詳細は記しておりませんが、とにかく、施設の風格を含めて、皇族の方々がご利用の任に相応しい建物となっていると言えましょう。



◎現在の仕様について

函館ハイカラ衣裳館

貸衣装部門がありました。洋装、和装など、男女向けに多数があり、修学旅行割引もあり、訪問者のターゲットの考察が重ねられていました。ドレス、タキシード、和装がキッズ用も充実してそろえてありました。細かい料金設定が明示されていました。

土産品、喫茶について

そのほかに、土産品、喫茶がありました。喫茶の特徴として、上述の大食堂が使われるとのことでしたが、入場した時間帯の関係で、利用する客は見当たりませんでした。その他、建屋の外には、キッチンカー型の軽食、アイスの利用客用スペースが配置されていました。



現在はこの旧函館区公会堂は函館市が所有し、地元の民間企業が指定管理を受けていました。業者名は名美興業株式会社と云い、他に、函館奉行所の指定管理業務も行っていました。業種は、函館市のハウス クリーニング業とありますが、交通誘導警備、(函館らしい) 埠頭業務などにも進出しており、札幌にも支店を進出している企業でした。こうした事業所の例では、町田市の指定管理を受ける企業がより地場企業であり、他にも飛躍するように、町田市の発注業務が改善されることが肝要だろうと考えています。



旧函館区公会堂のバルコニーから函館市の中心部を遠望する

◎旧函館区公会堂の建設経緯について

そもそも、この旧函館区公会堂は、明治 40 年 (1907) 8 月の大火により、元の施設が焼失してしまったというものでした。住民の集会所・商業会議所の事務所として明治 43 年 (1910) 9 月に竣工されました。とあり、住民有志による「公会堂建設協議会」が発足しますが、大火後であったこともあり、寄付金が当時の金額で数千円しか集まりませんでした。そこで、当時の豪商「相馬哲平」氏へ相談をした結果、5 万円の寄付があり、約 5 万 8 千円で建築することができました。という顛末が記されていました。

再建費用の大半を、この一人の豪商が用意した。それに住民有志がもともと募った寄付を合わせて、立派な旧函館区公会堂が再建されました。おそらく、「相馬哲平」氏は全額を出しても自身にとって金銭的な負担は変わらなかったでしょう。そうした側面を見ると、「相馬哲平」氏はあえ

て自分が全額を負担することで、一人の力で旧函館区公会堂が再建されるということをあえて、避けたのではないかとみるものです。公共に頼らず、事業者の寄付を募るといった協業の形で旧函館区公会堂を再建したことが、「相馬哲平」氏の度量であり、商人の心意気であったのでしょうか。今の時代に受け継がれたい、商工会議所の精神とみなされるあり様でした。



旧函館区公会堂内に掲示された、全国の公会堂の一覧資料

なお、今回の視察で、無所属会派 3 名の議員全員が作業服を着ていますが、それはこの 7 月 3 日の函館どつく株式会社の工場見学に際して、安全性確保のために、作業服を着用し、ヘルメット（函館どつく様でご用意いただきました）を被っての行程でした。次の視察日程を、旧函館区公会堂としたことで、服装を替える余裕がなく、同じ作業服のまま、不釣り合いの格好で旧函館区公会堂の視察を行ったものです。



旧函館区公会堂の見学で最初の部屋になります。



ドックに海水が入れられた状態



ドックで建造が行われています。

<問題意識の根底>参考資料掲載

平成12年6月定例会（第2回）-06月13日-05号 発言者19番吉田つとむ 冒頭部分

この商工会議所ができて、もう10年以上たつんじゃないかと思いますが、毎年予算を見ておりますと、もちろん予算自体は承認をしておるわけでありましたが、ずっと商工会議所に対して、年間5,000万円ほど補助がなされております。私は、商工業者の皆さん方というのは、力もあって、資金もあって当然事業をされておるわけであるし、もちろん事業を始めたばかりという人たちもいますが、全体としてはそういう余力のある人たちがやっておられる。そして、これから先の町田を自分たちの力でつくっていくという皆さんが組織をされておるだろうと思うんですが、今言いましたように、年間で5,000万円というお金をずっと出していかなくちゃいけない。本来は私は、政治と民間の関係でいいますと、こういう皆さん方が税の負担をされる、あるいは市の方に対していろんな企業や団体などが寄附をされる。そういうのが本来のこれからの自立した町のあり方ではないかというふうに私は思っておるわけでありましたが、果たして市の考えというのは一体どういうふうになっているのか、お尋ねをしたいと思います。

商工会議所というのは、ヨーロッパに始まったところでありまして、ヨーロッパのフランスのマルセイユというところで始まったそうであります。1599年だったと思いますが、今から400年ほど前にギルドホールというのが商工会議所の始まりと聞いております。当然フランスも、そういう自立的な旧来の体制を打ち破って出てきた皆さん方が新しい時代をつくるということで商工会議所をつくっていった。それが恐らく産業革命にもつながっていったんだろうと思いますが、町田の場合には、そういう精神が果たして生きているのかどうか、こういった点をこの場からお尋ねしたいと思います。

以上2点、本日の質問とさせていただきます。

.....

(終了)